

L02b 世界の流星電波観測が捕らえた2000年～2003年しし座流星群

小川宏(筑波大・自然)、豊増伸治(みさと天文台)、大西浩次(長野高専)、前川公男(福井高専)、
矢口徳之(AMRO-NET)

1998年に回帰した周期彗星 Temple-Tuttle は、ここ数年、しし座流星群の活発な活動をもたらした。近年、しし座流星群の極大予報は Dust Trail 理論の発展によってその極大時刻や規模の予報が可能となってきた。我々は、しし座流星群の全容を解明するために、昼夜関係なく天候にも左右されない流星電波観測を用いて、全世界の流星電波観測者のネットワーク「流星電波観測国際プロジェクト」を構築した。そして、これらのデータを統合することによって、ほぼリアルタイムにしし座流星群の活動を2000年よりモニターしてきた。

これらのモニターで得られた継続的な観測データより予報の検証ならびに流星群の活動を解明することができた。結果として、2000年以降の発表されていた予報が、本プロジェクトで得られた観測結果と良い一致を見せ、活動レベルも2001年が最大で、その後低下してきていることも予報通りとなった。また、極大期の解析より予想されていない極大も2001年そして2003年にそれぞれ検出されており、各極大の詳細なプロファイルも捕らえることができた。

本研究では、23カ国176地点の登録サイトを持つ「流星電波観測国際プロジェクト」で観測した2000年～2003年のしし座流星群の活動の解析結果を発表する。